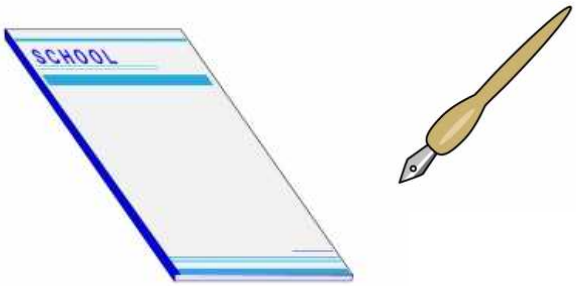
遠い学生時代曲で思い出す

「街のどこかに／さびしがり屋が一人／今にも泣きそうに／ギターを弾いている・・・」と、懐かしい歌声がラジオから流れてくる。作業の手を止めてしばし耳を傾ける。遠く６０年代終わり頃に流行した曲だ。千賀かおるさんが歌う曲で「真夜中のギター」だ。しっとりとしたメロディーにハスキー気味の伸びやかな歌声が溶け合う清涼感溢れる曲だ。

この曲の爽やかさとは裏腹に、当時は世情騒然としていた。大学紛争が野火のように東京から地方へと拡がった。私は地方の大学に在籍していた。１・２年生の頃は平穏だったが、３年生になると一変した。大学構内は、大きな立て看板や椅子・机が所狭しと散乱していた。終日、アジ演説が鳴り響いた。構内がデモ隊で埋め尽くされたこともあり、講義棟の出入り口がバリケードで封鎖されたこともあった。そのために講義のない日々が続いた。来る日も来る日も友達と下宿で「大学とは何を学ぶ所なのか」「大学紛争の行く末」等について口角泡を飛ばして語り合った。それでも足りず、喫茶店に所を移して熱く語り合った。語り疲れたはてに虚しさだけが残った。そんな時、千賀さんの伸びやかな歌声が虚しい心のすき間を埋めてくれた。

この曲を聞くと、遠い遠い学生時代のことが思い出されてならない。